

『中の根本の言葉を章とした知慧（根本中論）』

（第二十三章）

貪欲と瞋恚と愚痴は、  
妄分別より起こると説かれた。  
好ましい、好ましくない、誤りに、  
まさしく依拠したことより全く起こる。 1

好ましいと、好ましくないと、  
誤りに依拠して起こるもの。  
それらは本性より無く、  
それ故に、煩惱は正しく無い。 2

我の有性と無性とは、  
如何様にも成立することは無い。  
それが無く、諸煩惱の  
有性と無性は如何様に成立しようか。 3

それらの煩惱は何のものであるか。  
それも、成立することは有るのではない。  
何も無いものに、何のものとしても、  
諸煩惱は有るのではない。 4

自らの身体を見る如く、諸煩惱は、  
煩惱を持つものに五様相として無い。  
自らの身体を見る如く、煩惱を持つものは、  
煩惱に五様相として無い。 5

好ましいと、好ましくないと、誤りの、  
本性より有るのでなければ、  
好ましいと、好ましくないと、誤りに、  
依拠した煩惱は何のものであるか。 6

色形と音声と味と触感と、  
香と法（現象）の六様相は、  
拠所であり、貪欲と瞋恚と、  
愚痴のものであると考察された。 7

色形と音声と味と触感と、  
香と法（現象）ただそれだけであり、  
尋香の都のようであり、  
逃げ水や夢に似るのである。 8

貪欲と瞋恚と愚痴は、  
妄分別より起こると説かれた。  
好ましい、好ましくない、誤りに、  
依拠したこれより全く起こる。（仏）

好ましい、好ましくないという、  
誤りに依拠して起こるもの。  
それらは自性より無い。  
それ故に、煩惱は正しく無い。（仏）

それらの煩惱は何のものであるか。  
それも、成立することは有るのではない。  
もし、何かが無ければ、何が有ろうか。  
僅かな煩惱も有るのではない。（4・仏）

これらの煩惱は何のものであるか。  
それも、成立することは有るのではない。  
何も無いものに、何のものとしても、  
僅かな煩惱も有るのではない。（4・顕）

好ましいと、好ましくないと、誤りの、  
自性より有るのではない。  
好ましいと、好ましくないと、誤りに、  
依拠した煩惱は何のものであるか。（仏）

色形と音声と味と触感と、  
香と法（現象）ただそれだけ。  
尋香の都のようであり、  
逃げ水や夢に似るのである。（仏）

幻の人のようであり、  
映像に似たそれらに、  
好ましいや好ましくないものが、  
起こるとも、何処でなろうか。 9

それに依拠して「好ましい」と、「好ましくない」に対して名付けられる、「好ましい」は相對せずには有るのではないので、それ故に、「好ましい」は合理ではない。(10・仏)

それに依拠して「好ましい」と  
名付けられる「好ましくない」は、  
「好ましい」に相對せずには有るのではないので、  
それ故に、「好ましい」は合理ではない。 10

それに依拠して「好ましい」と、名付けられる「好ましくない」は、「好ましい」に相對しておらずには有るのではないので、それ故に、「好ましい」は合理ではない。(10・顛)

それに依拠して「好ましくない」と、  
名付けられる「好ましい」は、  
「好ましくない」に相對せずには有るのではないので、  
それ故に「好ましくない」は合理ではない。 11

それに依拠して「好ましくない」。「好ましい」と名付けられるものは、「好ましくない」に相對せずには有るのではないので、それ故に「好ましくない」は合理ではない。(11・仏)

「好ましい」が有るのでなければ、  
貪欲が有ると何処でなろうか。  
「好ましくない」が有るのでなければ、  
瞋恚が起こると何処でなろうか。 12

「好ましい」が有るのでなければ、  
貪欲が起こると何処でなろうか。  
「好ましくない」が有るのでなければ、  
瞋恚が起こると何処でなろうか。(12・仏)

もし、無常を恒常であると、  
そのように捉えることが誤りであるならば、  
空に無常は有るのではないので、  
捉えることは如何様に誤りであるのか。 13

もし、無常を恒常であると、  
そのように捉えることが誤りであるならば、  
空に恒常は有るのではないので、  
捉えることは如何様に誤りでないのか。(13・仏)

もし、無常を恒常であると、  
そのように捉えることが誤りであるならば、  
空を無常であると、  
捉えることも如何様に誤りでないのか。 14

空に無常は有るのではないので、  
捉えることは如何様に誤りでないのか。(13・顛)

もし、無常を無常であると、  
そのように捉えることが誤りでないならば、  
空に無常は有るのではないので、  
捉えることは如何様に誤りでないのか。(14・仏)

捉えるものと、捉えることと、  
捉える者と、捉えられるものの、  
一切は寂靜であり、  
それ故に、捉えることは有るのではない。 15

誤り、あるいは正そのものであると、  
捉えるものが有るのでなければ、  
何に誤りがあり、  
何に誤らないものが有るのか。 16

誤りとなったものに、  
諸々の誤りはあり得ず、  
誤りとなっていないものにも、  
諸々の誤りはあり得ない。 17

誤りとなったものに、  
諸々の誤りはあり得ない。  
誤りとなっていないものにも、  
諸々の誤りはあり得ない。(仏)

誤りとなりつつあるものにも  
諸々の誤りはあり得ない。  
何に誤りがあり得るかは、  
己自身で分析せよ。 18

諸々の誤りが生じていなければ、  
如何様であれば有るとなろうか。  
諸々の誤りが生じることが無ければ、  
誤りを持つものは何処にあろうか。 19

事物は自らより生じず、  
他よりまさしく生じるのではない。  
自らと他よりでもないならば、  
誤りを持つものは何処にあろうか。 20

もし、我と、浄と、  
常と樂が有るならば、  
我と、浄と、常と、  
樂は誤りではない。 21

もし、我と、好ましいと、  
常と樂が有るならば、  
我と知る、好ましいと知る、常であると知る、  
樂であると知ることは誤りではない。(仏)

もし、我と、浄と、  
常と樂が無いならば、  
無我と、不浄と、無常と、  
苦は有るのではない。 22

もし、我と、好ましいと、  
常と樂が無いならば、  
無我と、好ましくない、無常と、  
苦は有るのではない。(仏)

そのように誤りが滅したことによって、  
無明は滅すとなる。  
無明が滅したとなれば、  
行等は滅すとなる。 23

もし幾らかの煩惱である  
何か自性として有るならば、  
如何様であれば捨て去られるとなろうか。  
有るものを誰が捨て去ろうか。(24・顛)

もし幾らかの煩惱である  
何か本性として有るならば、  
如何様であれば捨て去るとなろうか。  
有るものを誰が捨て去ろうか。 24

もし、幾らかの煩惱である  
何かは自性が無ければ、  
如何様であれば捨て去るとなろうか。  
無いものを誰が捨て去ろうか。(25・仏)

もし、幾らかの煩惱である  
何か本性として無ければ、  
如何様であれば捨て去るとなろうか。  
無いものを誰が捨て去ろうか。 25

もし、幾らかの煩惱である  
本性として無いものは、  
如何様であれば捨て去るとなろうか。  
無いものを誰が捨て去ろうか。(25・顛)

「誤りを考察する」という第二十三章である。

※ (仏) は、『根本中論』チョコロ訳 (『ブッダパーリタ』に引用された旧訳) で、パツァブ訳 (新訳) と異なる記述。(顛) は、パツァブ訳 (新訳) ではあるが、『根本中論』本論と記述が異なる『顛句論』で引用された偈を示す。